

春燈



October 2009

10

主宰の句

安立公彦

をさな児の瞳ひた澄む原爆忌

早稲刈つて空の青さよ敗戦忌

地芝居や神もみちのく言葉にて

星合の面影ひとつ身に添へり

鉦叩いつまで鳴くや夜はふかし



燈下集



○ 中島和昭

父恋ひの一句ありけり江戸風鈴 (句集『蘭玉』雙)

篋をさんばら髪に男梅雨

よその芙蓉垣間見ること日課とす

一日一句芙蓉を詠んで師に及ばず

地の野菜一つを加へ盆供とす

○ 片桐てい女

滝の汗に見合ふ倅せ得たりしや

水着買つて海行き日時折り合はず

風の情にほだされてゐる登山帽

新糸や匂ひ・手触り・姿・艶

梅雨ふかし黄泉路の杖を忘るるな (悼 水上多美子様)

○ 長谷川照子

赤とんぼ指さしてみてひとりかな

不公平にメロンを切つてしまひけり

たたみなほす母の形見の秋袷

生前もここにこの壺夜の秋

今日もまた何となく過ぎ居待月

○ 鈴木榮子

白蚊帳に替りし夜の裾に遊ぶ

梅干届くやはらかき皺寄せ合ひて

不意に鳴く火の付くやうに油蟬

水中花ボトルシップのごと組ます

片陰長きカーン博士の通ひ路

○ 渡辺鶴来

八月十五日が来る滑走路の果ての海

ざざ降りとなりたる鉢の目高かな

口ずさむ敦の一句夕端居

振りむいてだあれもぬない極暑かな

銀座八丁衝動買ひの夏帽子

○ 西川保子

コンサートホール裹める緑雨かな

白芙蓉を愕かせたる風一陣

夕風のなすがままなり酔芙蓉

人待ちゐて恋にあらずよ星祭

翁慕ひし旅はもはるか天の川

○ 富山俊雄

操りの糸の見えねどあめんばう

鬱の日の鬱のまひまひつぶりかな

就中鳥羽一郎の日焼かな

五年十年忽ちのこと麦こがし

さるひとの胸にたたみし扇かな

○ 上山永晃

夏の雲器量問はれてゐたりけり

徹の花此の方異端にはあらず

天牛に頭韻踏んで鳴かれけり

尺蠖や矩も鯨も知らぬ世に

風鈴や忘れてをりし江戸言葉(祝・福玉 上木)

○ 佐藤信子

朝ごとの写経の硯洗ひけり

奈良墨を磨れば香にたつ夏書かな

緑陰や太極拳は風を抱き

暁天法話あとの茶粥や蟬しぐれ

分ちあふ灯影涼しき万灯会

○ 本多滋子

噴水のみだれ正して立ち上がる

駅までは遠き茅の輪をくぐりけり

裏口ゆ入つてきたる帰省の子

左千夫忌の岸にあそべる牛の影

父の忌のすこし過ぎたる施餓鬼かな

○ 山内 四郎

よく見ればひそかに稲の花ざかり

案山子には人間にない顔がある

炎天のわが影を押し進めけり

木槿咲く我が家外から眺めけり

手をのべし吾に応へて夏つばめ

○ 植田 利一

いつまでも帰燕の空をみつめをり(安訂さん連)

丸齧りしたき白桃玉蜀黍

梅雨に臥す粥一碗の奢りかな

蟬しぐれ真昼は淋し過ぎにけり

風呂桶で冷されてゐる西瓜かな(往時茫茫)

○ 柴崎 富子

日食を覗に箱舟や雲の峰

囀鮎騙し上手に徹したる

おひとつとどず蓮の葉鮎によばれけり

灯涼し戦火くぐりし貯金箱

針箱に釘さがすや羽蟻の夜

○ 園部 落郷

山の地図此処から徒歩や遠郭公

頂上の棚田一坪植糸終る

その中に田植汚れの出句あり

吟行も夫婦二人や夏帽子

蟬しぐれはたと止みけり日蝕時

○ 呂 秀文

病む薔薇に俄か庭師になりすます

ビール呷る敵の一人はうからかな

でで虫を路傍にふみし自己嫌悪

仄かなる香水たれかれ迷はせて

走馬灯来し方向もかも愚か

○ 呉 文宗

新茶飲む糸切底は古びたり

喜雨の中茶碗あふるる茶神「陸雨」像

隠し得ぬ老朽の相夏帽子

羅に鴻毛の身をただよはす

蛭殺す杖の丈押し縮めつつ

○ 井上正子

ばらの香や明日入院の身繕ひ

暮は親子三代の趣味蟬時雨

二十歳で爆死の恩師原爆忌

ちちははの声上げ哭けり終戦日

怠惰には過せぬ余生秋の蟬

○ 三代川玲子

夏雲や大地を穿つ杭打機

半円の夕虹を見き子のくる日

魚跳ねて川の黙ます草いきれ

山川草木身じろぎもせず蟬時雨

平積みの新刊本や夜の秋

○ 豊谷青峰

枇杷熟るる芭蕉生家や昼深き

斑猫のふいに消えたる伊賀の里

夏萩や俳聖殿は戸を閉ざし

石垣を蟻も伊賀者登り来る

伊賀越えに雲行き早し夏の果

○ 高埜良子

滴りや賽銭びかり十六井

ひつじ草寄り離る性古都の風

花木権五輪塔はも翳りなし

蓮の実の飛ぶや好みの源氏池

絵手紙のまとも書きする残暑かな

○ 吉川隆

でで虫にふり向く眼ありにけり

揚羽死す出自の紋を広げつつ

白靴のナース手をふる車寄せ

空き部屋の江戸風鈴の忘れもの

風入れや母の着物にかくれんぼ

○ 久本久美子

庭さびて泰山木の花ぞこれ(角川源義田邸二句)

さはさはと青芭蕉より青き風

海開き海喜びて凪ぎにけり

二十年通ふ湯の町蟬時雨

さからはず老いと道連れ風涼し

当 月 集

安立 公彦選



○ 星合や東京堂に春燈誌

泥少しつけて到来茗荷の子

染付や浜を見立ての夏料理

名園の蟬つややかに名告り出づ

道をしへ遅き出逢ひも縁かな

○ 篠原幸子

○ 竹内慶子

沙羅一花山家の門をともしけり

夕顔の実のすがほ見す道の駅

峡の駅忘れずに来る夏燕

夏霧や妙義の奥に山幾重

擬宝珠の花むらさきに遠嶺かな

○ 北岸邸子

天の川に流したきもの二つ三つ

七夕やねがひ無き身も星仰ぐ

またひとつ病殖やして星祭

片肌脱ぎの晒布眩しきギヤル御輿(天神祭)

淀川へ打ち込む祭太鼓かな(天神祭)

○ 川崎真樹子

夏草や実験動物供養塔

沖泳ぐ青き地球の人として

熱帯魚夢の端切れを縫合はす

不用意に漏らす本音やソーダ水

雲の峰親に似ぬ子で通しけり

○ 永島雅子

御所の門夏帽正し潜りけり

弁柄の回廊まぶし夏日向

ガイド聴くや片陰大き清涼殿

大夏木蔓を絡ませ自若たり

鱧皮に父語りある三姉妹

春燈の句

安立 公彦選

道をしへ真つ直ぐ行けと教へられ

東京 本田 保

飲み過ぎし葉や龍之介忌なる

自転車のかご丸ごとの西瓜かな
蝸や外人墓地の石畳

夏瘦のおろかな己さらしけり

老鶯や細川ガラシヤ夫人廟
庭師ゐる八雲旧居の涼しかり

清らかな流れにもどる螢かな

十六羅漢五百羅漢へ青葉風
城に入れば城の匂ひの晩夏かな

千の葉にかしづかれたる白蓮

神奈川 坂本 悠亘

江戸風鈴雨後の路地風はや奏つ

翔ぶ鳥に高さ許さぬ雲の峰
雲の峰指呼に御岳恵那を据ゑ

いのち欲り縋るごとしや空蟬は

岐阜 瀬戸 峰子

向日葵の揺れて哄笑笑することし

青梨の目ごとに育つ南風かな

千葉 吉村さよ子

青芝の雀を数ふガラス越し

木曾三川遍く領し雲の峰
滴りや乾坤潤す粒光る

塀に来て鴉の地鳴き返り梅雨

東京 清水 美子

巡回車の研屋を呼ばふ片かげり

木屋町やまづは一皿走り茄子

神奈川 松山三千江

箸置は珊瑚のかげら夏暖簾

広重のはすかひに切る夏の雨
紫蘇ジュースかりそめの恋赤く透く



余言

安立公彦

八月十五日が来る滑走路の果ての海 渡辺鶴来

字余りの句。しかしこの字余りは作者の熟慮の結果である。「八月十五日が来る」を「終戦の日や」とすると字数はクリア出来るが、一句に籠める作者の思いは霧散する。作者は敗戦の日を成人として迎えられていたのか。「滑走路の果ての海」には作者の深い思いが感じられる。それはまた、この句を見る人に、それぞれの「海」を思い出させよう。海の蒼さが哀切さに包まれている。

父恋ひの一句ありけり江戸風鈴

中島 和昭

沙羅一花山家の門をともしけり

竹内 慶子

「句集『繭玉』賛」の前書がある。『繭玉』は前主宰鈴木榮子顧問の第四句集。今年の六月出版、新聞の俳句欄にも紹介されている。著者の「あとがき」に、「観劇は私の生活の潤滑油」とある通り、芝居の句が句集を彩る。さらに全句を通して、「東京」という地域の市井の日常が、身を飾ることなく表現されている。それはまぎれもなく「昭和の東京」である。またそれらの句は、回想としてでなく、生活の句として詠まれているのがいい。

掲句の「父恋ひの一句」は、へ家族写真の裏の父の字の日来へほか。「江戸風鈴」がこの句集の内容を印象付けている。みごとに挨拶句だ。そしてその挨拶句を引き出すみごとに句集である。

この「沙羅一花」は「夏椿の花」。しかし「沙羅一花」とあると「山家」にもどことなく風格を感じる。それはまた「門」にしても同じだ。同時に「夏椿の花」にはこの季語にふさわしい内容があるろう。全ては言葉をどう用いるかということに關る。

毎月送られてくる投句用紙には、一句に適う言葉に至りつく前としか考えられない句がある。作品を推敲するということは、季語を含む言葉を見直すということである。

七夕やねがひ無き身も星仰ぐ

北岸 邸子

わが国の行事の中で、七夕ほど人々に親しまれて来た行

事は少ないのではないか。季語の傍題も『日本大歳時記』には三十五ある。しかしまた七夕ほど季語と季感のずれの大きな行事もめずらしい。

本来陰暦七月七日の行事だが、現在は大方の人が新暦の七月七日に行く。それは幼稚園を含む子供たちの場が、新暦で祝っていることも原因の一つと言える。ちなみに今年の七夕は新暦では八月二十六日。季節は夏と秋に分れ、その間に五十日のずれがある。

石田波郷の〈七夕竹惜命の文字隠れなし〉の句には、陰暦七月七日の季節感がある。作者の句の「七夕」も同じく陰暦の句だろう。それは「星仰ぐ」が示している。中七に「ねがひ無き身も」とあるが、「星仰ぐ」で七夕の本意は尽くされている。達意の句である。

口に余して水飲む幸や原爆忌

金森 涼

十月号の投句には「原爆忌」の句が多かった。当然のこと。この間、六十四年の歳月が過ぎていくが、被爆者はもとより、あの時代を経験した身には、六十四年は一瞬の間である。この句、「口に余して水飲む幸や」に、その思いがよく表現されている。

己が影踏み炎帝を踏み登る

妹尾 貞雪

八月号の、林紀夫・妹尾貞雪両氏の特別作品「山の句」

は好評だった。こういう企画を望んでいた人も多かったのだろう。現在中高年の登山者が増加しているという。それは登山に限られたことではないが、「山」には殊に人の心を捉える霊力のようなものがあるのかも知れない。掲出の句。この「己が影」は六合目辺りか。「炎帝を」を中に、「踏み」のリフレインが力強く迫る。

飲み過ぎし薬や龍之介忌なる

本田 保

人は加齢とともに、病いの一つや二つ身内に宿るのは当然のこと。作者もまたその一人か。いつもの通り幾種もの薬のみ、少し薬のみ過ぎかと思つた瞬間、ふと今日は芥川龍之介忌だという思いが湧いた。七月二十四日。

『随筆歳時記』に「我鬼忌」という一章がある。安住敦はその頃健康にいいということで、毎朝食塩水を飲んでいった。ある日、久保田万太郎と会食中、敦は卓上のコップに食塩をひとふりして飲んだ。その時万太郎が何とも言えぬ苦い表情で、「君、それはよしなさい」、「芥川がね、死ぬ前に、よくそれをやりましたばー」。その時二人は自裁直前の芥川の話をしていた。そういう内容だった。私たちにとって芥川龍之介は文学史上の作家だ。敬愛の思いでその忌日俳句を作るが、万太郎や敦の心の中には、龍之介はまだ生きていたのだ。作者もまた龍之介への深い思いでこの句を作ったのだろう。